

第二三回野尻湖クリルタイ

後藤 晃

アルタイ学研究者を中心とし、広く北アジア、中央アジア、西アジアの研究者の集会である野尻湖クリルタイは、一九八六年七月二〇日から二三日まで、例年のとおり、野尻湖ホテルで開催された。参加者は以下の四五名である。

池内功(四国学院大)、烏蘭(中国・内蒙古大・東京外大)、宇野伸浩(早大・院生)、梅村坦(立正大)、海老沢哲雄(埼玉大)、大塚和夫(国立民族学博物館)、岡洋樹(早大・院生)、岡田英弘(東京外大A A研)、小谷伸男(富山大)、片山章雄(東洋文庫)、加藤和秀(東海大)、川瀬豊子(大阪外大・非常勤)、河内良弘(京都大)、川又正智(国士館大)、河村真治(広島大・院生)、神田信夫(明治大)、菅野裕臣(東京外大)、菊池俊彦(北海道大)、北川誠一(弘前大)、金周源(韓国・嶺南大・東京外大)、楠木賢道(筑波大)、栗林均(学振特別奨励研究員・東京外大)、後藤晃(山形大)、

佐藤道郎(岩手大)、塩谷茂樹(京都大・院生)、設楽国広(都立千歳高・東海大非常勤)、武田美奈(弘前大・学生)、中河原育子(名古屋大・研究生)、永田雄三(東京外大A A研)、橋本勝(大阪外大)、樋口康一(愛媛大)、プリンバト(中国・内蒙古大・国学院大)、細谷良夫(弘前大)、萩原守(大阪大・院生)、堀川徹(京都外大)、松村潤(日本大)、マリア・サーキム(中国・新疆医学院・神奈川大)、宮崎卓(東海大・学生)、宮脇淳子(学振特別奨励研究員・東京外大A A研)、森川哲雄(九州大)、山花京子(京都外大・学生)、吉田順一(早大)、李龍植(中国・中央民族学院・東京外大)、林恩顕(台湾・国立政治大辺政研究所・東洋文庫)、薬谷栄(東京外大・院生)。

第一日(二〇日)、参加者は原則として夕食前に到着し、夕食後、植村清二、山田信夫両氏が不参加になったこと等にもなうプログラムの調整がおこなわれた。

第二日(二一日)午前、第一セッションは細谷良夫の司会で、海外事情報告(一)橋本勝「モンゴル人民共和国滞在から」で始まった。同報告では、モンゴル国立大学における日本語教育の現状、同大学文学部におけるモンゴル語文学科・外国語研究室の事情、モンゴル科学アカデミー言語・文学研究所主催のウラディミルツォフ生誕一〇〇年記念学術会議の発表者と論題、などの紹介があった。また、

モンゴル人民共和国の西端ホブト県(アイマク)のホブト郡(ソム)、ミヤンガト郡、ウオルト郡を訪問して、カザック語、ミヤンガト語、ウオルト語方言等の調査をおこなったことの報告もあり、あわせて、モンゴルの人と風土の紹介があった。さらに、モンゴルの最近の出版事情と言語・文学関係の若干の文献紹介があった。今回も報告者のコンフェッションは報告の前後におこなった。橋本はモンゴル滞在の各種の報告を、ウランバートル刊の“Mongolia”六、大阪外大刊の『朔風』一、“AV Journal”八、『ひろば』八二に掲載し、神戸外大で口頭で発表した。また近く発行予定の『文化人類学事典』(弘文堂)に「アルタイ語族」、「ツングース・マンチュール語派」、「モンゴル語派」、「チュルク語派」の四項目を執筆し、国立民族学博物館の「言語遊戯の民族誌」共同研究会で「モンゴルの言葉あそび」と題する発表をおこなった。

つづいて当初のプログラムにはなかったが、海外事情報告(二)として、林恩顕「中華民国における中国边疆研究の現状」の報告があった。大陸で少数民族とよぶ存在を中華民国では边疆民族とよぶ。林は、大学における边疆教育の目的は、边疆研究者の養成と、边疆行政の担当者の養成にある、とし、一、国立政治大学边疆研究所、二、国立政治大学社会学系、三、文化大学民族与華僑研究所、四、文

化大学史学系、五、国立台湾大学歴史学系、六、国立台湾師範大学歴史学系、七、国立台湾師範大学歴史研究所・中文研究所の各々に所属する研究者を紹介した。また、中国辺政協会、中華民国滿族協会、中華民国蒙古文化協進会、蒙藏學術研究基金会、台北市青年服務社、大陸救災總會西藏兒童之家、中華民国漢藏協會、中華民国南亞協進会、台北市靈山講堂、歐陽無畏教授講座、新疆省政府弁事処などの台湾の民間の边疆研究団体の紹介、さらに中央研究院歴史語言研究所、中央研究院近代史研究所、中央研究院民族学研究所、国立故宫博物院の各々の研究者の紹介をおこなひ、最後に林は、台湾の中国边疆研究学者の系譜を挙げ、定期刊行物を紹介した。

つづいて、海外事情報告(三)として、烏蘭「近年の中國に於ける蒙古史研究の概況」があった。同報告はまず、中国において蒙古史を研究している機関が一四あり、研究者は百人を越えることを指摘し、内蒙古大学蒙古史研究所、内蒙古社会科学学院歴史研究所、中国社会科学院民族研究所、南京大学歴史学部元史研究室、中国社会科学院歴史研究所、中国社会科学院近代史研究所、中央民族学院歴史学部、中国人民大学清史研究所、内蒙古師範大学歴史学部、新疆社会科学院民族研究所、新疆大学歴史学部、南開大学歴史学部、西北大学西北歴史研究室、蘭州大学歴史学部の各々に

ついで、その活動や所属の研究者を紹介した。つづいて学会紹介があり、一九七九年に成立した蒙古史学会は、内蒙古社会科学歴史研究所に本部があり、『蒙古史研究』を刊行していること、南京大学歴史学部元史研究室に本部をおく中国元史研究会は、一九八〇年に成立し、『元史論叢』と『中国元史研究通訊』を刊行していること、中国社会科学民族研究所に本部をおく中国民族史学会は、一九八三年の中国民族史研究会を改名して一九八五年に成立したもので、『中国民族史研究通訊』を刊行していること等がその内容であった。同報告はまた近年の蒙古史研究の特徴に言及した後、一九八六年九月に「元史国際討論会」が南京で、一九八七年秋には「国際蒙古学大会」がフフホトで開催される予定であるなどの研究会議の動向を紹介した。報告の詳細は近く文章化されて発表される。

つづいて、神田信夫、松村潤、設楽国広よりコンフェッションがあった。神田は、東洋文庫の清代史研究室で新たに研究会を発足させ『政考便覧』を講読していること、三上次男氏を会長に「満族史学会」が組織される予定であることと、「清史研究」が発刊されたことを報告した。神田はまた、「好太王碑学術参観団」に参加して集安等を訪問し、中国第一檔案館成立六十周年記念「明清檔案与歴史研究学術討論会」に出席して「東洋文庫所蔵の満文檔案」を発表

した。また、『駁台史学』六六に「清初の漢軍武将石廷柱について」を、『東洋史研究』四四一―に書評「莊吉発『故宮檔案述要』」を、『東洋学報』六七―三・四に書評「遼寧檔案館等訳編『三姓副都統衙門満文檔案訳編』」を発表し、『石田幹之助著作集第三卷』（六興出版）に解説を執筆した。松村は、東洋文庫のユネスコ東アジア文化研究センターの所長に就任したことと、同センターの活動、特に中国、北朝鮮、韓国、日本の古代都市の比較研究プロジェクトについて紹介した。松村はまた、上記神田と共に、「好太王碑学術参観団」および「明清檔案与歴史研究学術討論会」に参加し、『石田幹之助著作集第二卷』の編集を担当して解説を執筆し、『内陸アジア史研究』二に無圈点字による旧満文の天命二年から六年につくられたと推定される「寒字檔漢訳勅書」を発表する。設楽は、『講座イスラム』一、イスラム・変転の歴史」に「現代のトルコ―イスラムと世俗主義の問題点―」を、『史潮』新一八に「オスマン帝国におけるイスラムと民族―青年トルコ人革命期を中心として―」を発表した。後者について永田雄三からの厳しい批判があるが、近く反論する予定である。

午後、参加者の多数が野尻湖を一周する遊覧船に乗船して英気を養ったのち、北川誠一の司会で第二セッションにはいった。まず、マリア・サーキムより海外事情報告（四）

「新疆ウイグル自治区における教育と言語」があった。同報告は、新疆ウイグル自治区について簡潔に述べたのち、自治区に一四の大学があること、その入学試験は、少数民族教育が遅れているため、全中国の統一試験ではなく、新疆独自の試験であるが、最近では数学などでは統一問題をを用いていること、大学での教科書は全国統一教科書と民族語の教科書を併用していることなどを紹介した。また、ウイグル語と日本語が似ていることを指摘し、現在私学協会が新疆から留学生を招いているが、このような交流が重要であることを強調した。

つづいて岡田英弘より海外事情報告(五)「国際中国少数民族言語・文化・歴史シンポジウム (International Symposium on the Languages, Cultures and History of the Minority Nationalities of China)」があった。同シンポジウムは、カリフォルニアのサンタ・バーバラで一九八六年一月二六—二九日に開かれ、日本からは岡田と宮脇淳子が出席し、岡田は「Mandarin, a language of the Manchus: How Altaic?」を題し、ベンタリン(中国共通語)は北京の満人の言語の強い影響下で形成されたものであることを論じた。中国からは、モンゴル人、ウイグル人、ティベット人、回族、漢人の計十一人が参加し、各々が発表をおこなった。発表の総数は二四で、岡田はその一つ一つの概

略を紹介した。岡田はひきつづいてコンフェッションをおこなった。A A研の共同研究プロジェクト「内陸アジア史文字資料の研究」では、その第六回研究会で清水宏祐「大セルジューク朝の歴史叙述」と吉田順一「モンゴル秘史の史料批判——特にクイテンの戦いについて——」、第七回研究会で小山皓一郎「オスマン朝の歴史叙述」と佐口透「内陸アジア近世史の諸問題」の研究発表を受けた。またA A研で、『満文老檔』の電算機処理を完成させ一語索引のプリントアウトを可能にした。A A研に滞在していたRon Ratchewitz教授の国際東洋学者会議における特別講演「チンギス・カン／カガンの称号の意義」を司会し、通訳した。A A研はまたW. Heisig Libraryを購入しようとしている。NHKラジオ「建国記念の日特別番組・古代青銅器の謎」に出演し、『エグゼクティブ・アカデミー・シリーズ』に「満洲民族はいかに中国を創ったか」と「蒙古自治運動と日中関係」を寄稿した。また「辺政研究所年報」一六に「藏蒙文哲布尊丹巴伝記資料五種」を発表し、集英社から「中国の英傑九・チンギス・ハーン」を出版する予定である。

菅野裕臣は、東京外大朝鮮語科に滞在している金周源・李龍植両氏を紹介したのち、コンフェッションをおこなった。菅野は月刊「基礎ハングル」を編集し、NHK「アン

ニヨン・ハシムニカ」のラジオ講座を九月から担当する予定であり、第二回コリア学国際セミナーを主催する。金周源は、菅野の通訳でコンフェッションをおこない、昨年韓国アルタイ学会が開かれたことなど、韓国のアルタイ学についてその概略を報告した。金は北方ツングース、エヴェンキ、エヴェン語の研究に従事し、『金芳漢先生回甲記念論文集・歴史言語学』（一九八五年、ソウル刊）に「ツングース諸語の人称語尾」を発表し、『蒙古語・満・ツングース語の言語構造』の満・ツングース語の部分を担当して、共著で出版する予定である。中国の朝鮮族の出身である李龍植は、朝鮮語文体論を専門とし、中央民族学院に所属している。中国には七つの民族学院があるが、中央民族学院はその最大のもので、アルタイ学関係を専攻する学生は千人ほどで、教員は七〇人ほどである。その図書館には解放後の民族語の雑誌・新聞のすべてがそろえてある。中国の朝鮮族の人口は現在一八〇万人ほどと推定され、三種の朝鮮語の新聞と二〇種の定期刊行物がある。本年八月には第一回国際朝鮮語セミナーが北京で開催されるが、これからも研究の国際交流は活発におこなう予定であり、李が窓口となるので日本の研究者は接触してほしい。以上が李のコンフェッションであった。海外からの参加者の最後としてプリンバトは、日本語とモンゴル語の比較研究をめざして、日本

の古典、特に万葉集を読んでいる、と報告した。つづいて、あらかじめ配布されていた参加者名簿の順で各自のコンフェッションがおこなわれた。池内功は「元代石碑『鎮江路儒学復田記』をめぐる諸問題」を科研費報告書『中国史における中央政治と地方社会』（代表野口鉄郎）に発表し、『中国朝鮮の史籍における日本史料集成・李朝実録之部・第八冊』を共著として国書刊行会から出版した。池内はまた、四国東洋史研究者会議は今年第三回を香川でおこなうこと、昨年は高知大でおこない、青木富太郎が研究六〇年の回顧を話したことを報告した。宇野伸浩は、モンゴル帝国時代ウリヤンハイ地方にいたホイン・イルゲンという部族について、その性格が遊牧民的か狩猟民的かについて考察して『早稲田大学大学院文学研究科紀要』別冊一二に「ホイン・イルゲン考——モンゴル帝国・元朝期の森林諸部族——」として発表し、またオールドについて研究をすすめている。梅村坦は、張承志の著作を編訳して『モンゴル大草原遊牧誌』（朝日選書）を出版し、『トルファン・ウイグル人社会の一面』（東洋史研究会大会）を口頭発表した。梅村はまた、東洋文庫の中央アジア・イスラム研究室が主催する「イスラム国家論研究会」について報告し、また科研費報告書『イスラム圏における宗教運動に関する総合的研究』（代表護雅夫）が同研究室を中心に刊行された

こと、さらにおりから来日中の中国社会科学院民族研究所の代表団について紹介した。

海老沢哲雄は科研費報告書『中国史における中央政治と地方社会』（前出）に「元代における僧道の免税問題」を發表し、中書省が課税を求め、宣政院が免税を要求したことを論じた。また現在はローマ教皇使節がバイジュ・ノヤンのもとに来たことについて研究中。岡洋樹は修論「乾隆期清朝のハルハモンゴル支配」でツェングンジャブが清朝には隔たりをおいていたのに対し、サンジャイドルジは清朝と密接な関係を維持していたと説き、また旗地の確定は実際には乾隆末期であったことを指摘した。小谷仲男は、去年、パキスタンのガンダラ遺跡の発掘に従事し、今年また同発掘を継続する予定であること、また第一回の発掘調査報告書『ガンダラ仏教遺跡の総合調査』（京都大学）でクシャン朝の貨幣について解説したことを報告した。小谷はまた、『富山大学人文学部紀要』一〇に「中国都市城壁の源流——古代西アジア、インドと関連して——」を、『とやま文学』四に「新出土のガンダラ石彫——白犬がブツダに吠える話——」を、『遙かなる文明の旅・四』（学研）に「中国に渡来した西域・インド僧」を發表した。最後に河内良弘がコンフェッションをおこない、現在京都大で満洲語の史料を集め、また満・漢文『太宗実録』をテキストと

して満洲語を読める学生を養成しつつある、と報告した。河内はまた、「明代遼陽の東寧衛について」を『東洋史研究』四四—四に發表した。

夕食後、大塚和夫が、翌日の発表の参考の意味をこめて、エジプトとサウディアラビアの人と自然のスライドを紹介した。

第三日（二二日）の午前の第三セッションは後藤晃の司会ですすめられ、まず、第二セッションのつづきとして各自のコンフェッションがつづけられた。片山章雄は、東京、関西、名古屋、北陸の四つの若手研究者の会の合同合宿を本年も白馬でおこなうことを報告した。片山は、東洋文庫で「大谷探検隊あれこれ」を、東方学会で「古代テュルク碑文における方位の問題」を口頭発表し、季刊『東西交渉』四—三／四—四／五—一に「大谷探検隊関係記録拾遺・二・三」を發表した。加藤和秀は、東海大のバルカン・小アジア研究会が、所員十余名の足利記念バルカン・小アジア研究所に昇格して、月例研究会をもち、機関誌『バルカン・小アジア研究』を継続発行し、ブルガリアで発掘を継続していることを報告した。加藤はまた、『文明』四七に「イラン史とイスラーム」を發表し、『史学雑誌』の「一九八五年の歴史学界——回顧と展望、中央アジア」を分担した。川瀬豊子は、『西洋史学』一三七に「ペルセポリス出土『城砦

文書」における *kanuski*「再考」を発表し、オリエント学会大会で「ペルセポリス王室経済圏における馬の飼育・管理」を口頭発表した。川又正智は、イラクのチグリス東岸の発掘に従事し、「テル・ジガン第一次発掘調査報告」(共著)を『ラーフィダーン』五・六に発表した。河村真治は、卒論で漢人商人のモンゴル進出を中心に考察したが、現在は従来の遊牧社会が大きく変容した清代モンゴル史を研究中である。

菊池俊彦は、ソ連のゴルノ・アルタイ自治州で日ソ共同発掘隊により旧石器時代の遺跡や青銅器時代の積石塚の発掘がなされていること、菊池は学振の派遣でソ連にいて現地参加する予定であったが、それが不可能になった事情について報告した。菊池はまた、「ヂコヴァと南カムチャトカ考古学」を『窓』五四に、カムチャッカ半島の人口わずか数千のコリヤーク民族がなぜ民族区を成立させたかを論じた。「コリヤーク民族区の成立とシベリア少数民族問題」を科研費報告書『変革期アジアの法と経済(代表菊池英夫)』に、書評「加藤晋平著『シベリアの古代文化と日本』」を『考古学研究』三二―四に発表し、「岩波講座・日本考古学、別巻二」の「文献解題・北アジア」の「総説」および「青銅器時代以降」を分担執筆した。北川誠一は、『史学雑誌』の「一九八五年の歴史学界——回顧と展望、西アジア・北ア

フリカ・イスラム時代」を分担し、「グルジア・ソヴィエト社会主義共和国科学アカデミー出版歴史学東洋学関係文献(一九八三年)」を『史朋』一八に、「レヴォン・ステパニ・ハチキャン、一九一八—一九八二」を『史朋』一九に、「ムヒタル・ゴージュ法典研究序説」を科研費報告書『変革期アジアの法と経済』(前出)に、イランにおけるモンゴル人政権が現地の支配者に対していかに寛容であったかを論じた「ヤズド・カークイエ家とモンゴル人」を『弘前大学人文学部・文経論叢』二二―三に、「グルジアの歴史学、東洋学関係出版物(一九八四年)」を『日本中東学会会報』一に発表し、「小ロル・アタベク朝の成立」と「中世イラン人、アルメニア人の仏教観」を近く発表する予定である。

楠木賢道は、卒論で明代女真史を扱い、修論では「清初の支配体制」と題して、ヌルハチ時代の統治機構と明代遼東鎮の政治機構を旧満洲檔などを用いて比較した。後藤晃は、学振西アジア地域センターの派遣研究員として半年カイロに滞在したことを報告した。後藤はまた、『概説イスラム史』の第一章「イスラムの政治的展開」を、『講座イスラム・イスラム思想の営み』に「アラブ文化とイスラム」を分担執筆し、『三笠宮殿下古稀記念オリエント学論集』に「コーラン」にみえるウンマ」を、『アジア・アフリカにおけるイスラム化と近代化に関する調査研究——昭和五

八・五九年度共同研究プロジェクト報告——」に「ハガリスム——イスラム到来前後のシリア——」を、『*Historical Cities of Asia*』1986, Univ. Kebangsan, Malaysia』、*'Al-Madina: a historical analysis of the city at the time of Prophet Muhammad'*を発表した。佐藤道郎は、スリランカ、インド、バングラデシュで寺院文献を集め、現在その報告書を執筆中である。またボロニア国際仏教学会で『*Sara bai's Lam rim*』を、ミュンヘン国際テイベット学会で『*Die Bedeutung der gshanon Philosophie*』を、ボン叙事誌シンポジウムで『*Motiv und Themen der buddhistischen Erzähliliteratur*』を口頭発表した。塩谷茂樹は、モンゴル言語学を専攻して、方言に興味をもち現在ホルチン方言を研究中。修論では「現代蒙古語ハルハ方言における語構成分析——特に派生接尾辞を中心とした考察——」を書いた。武田美奈は、オスマン・トルコ支配下のレバノンの豪族支配を卒論で書く予定。中河原育子は、インド仏教美術を研究している。

永田雄三は、A A 研のイスラム圏海外学術調査が本年はイラン南北道を中心に調査する予定であること、同研究所の共同研究プロジェクト「イスラム化」は、地方在住の研究者に旅費を支給する本研究会以外に、月例会を開催していること、「日本中東学会」は「年報」第一号を出版し、本

年度も順調に活動していることを報告した。永田はまた、『概説イスラーム史』で「支配とエリート」を、『中世史講座五、封建社会論』で「西アジア封建社会論」を、『民族の世界史一、スラブ民族と東欧・ロシア』で「オスマン帝国とスラブ民族」を分担執筆し、「オスマン時代のシリア史に関する若干の覚書」を『アジア・アフリカ言語文化研究』三二に、「歴史の中のアーヤーン」を『社会史研究』七に近く発表する予定である。細谷良夫は、弘前大学で昨年開催した東北中国学会の報告を『湖南』六に発表した。また、同学会の際に三田村泰助氏を中心に満洲史の研究者による談話会をもち、その時の議論を「清初史談話会（上・下）」として『東方』に発表したこと、また同大学で日本道教学会を開催したこと、また論文集『道教と宗教文化』を編集会で平河出版社から出版する予定であることを報告した。細谷はまた、昨年のクリルタイの報告を『東洋学報』六七—二二に、「順治・康熙朝の正一教——清朝における正一教の動向（一）——」を『弘前大学人文学部・文経論叢』二—三に発表し、「雍正朝の正一教——法官婁近垣を中心に——」を『東方学』七二に発表する予定である。山花京子は、英米言語学を専攻する学生であるが、古代エジプト史に興味をもち勉強している。

以上のコンフェッションにつづいて、「内陸アジアを考え



る視点」と題して、シンポジウム形式での研究発表をはじめた。最初に、世話人の細谷良夫からシンポジウムの主旨の説明と、各発表者へ「内陸アジアを考える視点」を発表のなかで述べてもらいたいむねの要請があった。シンポジウムは、言語学の立場(樋口・栗林)、人類学の立場(大塚)、民族学の立場(藁谷)、歴史学の立場(宮脇)をそれぞれふまえて構成されたが、以下にはコンフェッションを含めて時間をおって紹介する。

まず言語学の立場から樋口康一「蒙古語訳『法華経』における *boged* の用法について」の発表があった。中世モンゴル語の *コピュラ bog* に語尾 *ged* がついた副動詞 *boged* は、「……であって」という意味で、『モンゴル秘史』、『入善提行論』などでは強調のはたらきが認められる。この用法は、一四世紀以降、用いられなくなる。しかし、一八世紀に成立したと考えられる『法華経』モンゴル訳では、この形が多出する。仏典のみに見られるのでテイベット語原典の *nyid* の機械的直訳形であるとも予想されたが、実際は両者に対応関係はない。モンゴル語仏典は、テイベット語仏典の忠実な訳であり、特に述語は完全に対応しているが、それ以外では、モンゴル語として独自の表現をする工夫がなされている。とすれば、このような *boged* の用法は、どのような起源をもつのであろうか。以上が樋口の発表の概要

であった。ひきつづき樋口はコンフェッションとして、西田龍雄監修『言語学を学ぶ人々のために』(世界思想社)の「歴史・比較言語学」の項を執筆したことを報告した。右の発表に対して、宮脇淳子から、*boged-nyid* の対応は、テイベット語から翻訳したモンゴル人が訳文を仏典らしくするために、元来は対応しない箇所にも使用したのではないか、なお、仏典のオイラト語訳もあるが、それは完全な訳ではなく、テイベット語をよく知らない読者のための半分訳ともいえるべきものである、との意見があった。また、岡田英弘は、ジャンルによる文体の差は時代をかならずしも示さず、仏教モンゴル語ともいえるべきものが想定されないか、ウイグル語からの影響は考えられないか、トルコ語の動詞は名詞とも考えられるが、ウイグル語の同様の言葉には、格助詞はつくのであろうか、との質問をした。梅村坦は、漢文仏典の「不知」と対応するウイグル語訳と *boged* の対応は調査済みか、社会経済文書には *ol* という表現があり、様々な問題を含んでいる、と指摘した。プリンバトは、*boged* は通例強調であるが、仏典では *boged* をとって解釈してもまったく問題はなく、この場合は *boged* は文体を整える語句で、強調と解するのは難しい、との意見を述べた。塩谷茂樹は、*boged*、*kiged* の外に現代語的 *begin*、*bogäd* は仏典にあるか、と質問し、樋口から「ない」という答を得

たのち、モンゴル語は元來接続詞をもたず、連用語尾でそれが現されるが、現代語の「AbaB」のBはどのような起源か、と質問した。この質問に対して、何人かからペルシア語との関連が指摘された。

午後の第四セッションは、梅村坦の司会で進められ、まず、午前中に完了しなかったコンフェッションのつづきがおこなわれた。堀川徹は、京都大西南アジア史学科で、教授、助手の異動があったことを報告し、京都大付属図書館のイスラム文化センター刊『中東地域の生活用品と関係図書目録』を紹介し、京都で乾燥アジア談話会が開かれていることを報告した。堀川はまた、「京都外国語大学所蔵ペルシア語およびオスマン・トルコ語写本コレクションについて(二)」を、『京都外国語大学研究論叢』二六に、「オスマン帝国とシャイバーン朝との外交関係」を、『三島財団学術奨励金研究報告』に発表し、「紹介『概説イスラーム史』」を『オリエント』に、「シルクロードとキセル」を『季刊東西交渉』に近く発表する予定である。森川哲雄は、昨年内蒙古を旅行したことを報告した。森川は、「一七世紀初頭の内蒙古における三人の仏教の高揚者について」を、『蒙古史研究』一(フフホト刊)に、「把漢那吉の降明事件について」を『九州大学教養部、歴史学・地理学年報』一〇に、「書評『珠榮嘎校注『Erdeni tunumal neretü sudur orosiba (阿

拉担汗伝)』」を『東洋学報』六七一・二に発表した。萩原守は、二年にわたるウランバートル留学、その間のソ連、東欧、トルコ旅行、帰路の内蒙古、青海、新疆旅行を終え、現在は清朝支配時代のモンゴル、特に行政制度、裁判制度について研究を進めている。宮崎卓はトルコ民族史、ペルシア史に関心をもっている。吉田順一は、内陸アジア史学会に関して、今年の大会は岡山の就実大学で開催される予定であること、機関誌『内陸アジア史研究』の第三号が印刷交渉中であることを報告した。吉田は『日本における歴史学の発達と現状』六の「北アジア」を分担し、「三脚トゥルガから籠型トゥルガへ」を『季刊民族学』三四に、「タイチウト部衆の来属——『聖武親征録』、『集史』、『元史』太祖本紀の比較検討」を科研費報告書『アジア史における年代記の研究』(代表長澤和俊)に、張承志著・梅村坦編訳『モンゴル大草原遊牧誌』の書評を「実体験を通じ遊牧文化の本質に迫る」と題して『公明新聞』六年六月二三日に発表し、共著書『蒼き狼たちのモンゴル』を日本テレビから出版した。また、「モンゴル秘史の分析」をA.A.研の共同研究プロジェクト「内陸アジア史文字資料の研究」の第六回研究会で口頭発表した。さらに、「春日行雄氏作成『モミシガン旗調査図』の調査分析」を『モンゴリカ』に掲載する予定である。

つづいてシンポジウムの発表に先立って、大塚和夫がコンフェッションをおこない、エジプトを中心に民衆イスラームの実像の人類学的調査研究をおこなってきたこと、国立民族学博物館の活動の概略について報告した。「民衆イスラーム論再考に向けて」と題する研究発表は、オランダ・ユトレヒトの宗教学者ワールデンブルグの *popular Islam* 論を紹介、批判して、本当に「民衆イスラーム論」というものが成り立つのかを論じた。ワールデンブルグの説にそって、顕著なポピュラー・イスラーム形態の諸例、イスラーム的民衆運動のいくつかの例、イスラームの三分類説規範的、対抗的、民衆的を提示したのち、大塚は、「規範的イスラーム」という述語に関してその批判を展開した。イスラームには確かに「規範」とみなされるシャリーアが存在するのは事実であるが、それを「規範」としてとらえることが、文化人類学や社会学で有効な方法か。神学的カテゴリーでは、社会現象は把握できないのではないか。ワールデンブルグが「規範的」とするイブン・タイミーヤやワッハブ主義と、「民衆的」としたムスリム同胞団やジハードとの間には共通するものがあるのでは。ウラマーとスーフィーが「規範的」と「民衆的」に対立するだけではなく、両者が複合的に存在する実例がある。「高踏的スーフィー」、「民衆的ウラマー」の存在、原理主義者に多い世俗的知識

人からイスラームへの接近という問題もある。社会現象として様々なレベルのイスラームがあり、「規範的」イスラームも「民衆的」イスラームも、二元対立するものとしてではなく、複合的に存在している。以上が大塚の批判であり、自身の考えであった。

時間の関係で、大塚の発表に対する議論は割愛され、ひきつづいて、薬谷栄がコンフェッションと研究発表をおこなった。薬谷はまず、二年にわたりウランバートルに留学したこと、モンゴルにおける現代の遊牧の問題を文化人類学の視点から修論で扱う予定であること、「雌ラクダが涙を流す」を『モンゴリカ』四に発表する予定であることを報告した。「モンゴル牧民の土地空間に対する認識」と題した研究発表は、モンゴル人が牧畜用地をどのような述語で把握しているかに関する報告で、ハンガイ、タル、ゴビの三つをとりあげ、これらは学術上、行政上の地理帯としての理解のほかに、元来牧民がもっている個々の生活圏の内部の土地空間の呼称でもあることを論じた。これらの三つの差異は、それぞれの地にある草の種類の差異でもあり、特性の束として表わすことができる、と薬谷は結論づけた。本発表に関して、吉田順一が歴史的視点から若干のコメントを付した。

つづいて、宮脇淳子が、コンフェッションと研究発表を

おこなった。宮脇は「国際中国少数民族言語・文化・歴史シンポジウム」(前出)に参加し、A A研の共同研究プロジェクト「内陸アジア史文字資料の研究」の第五回研究会(報告者、間野英二・細谷良夫)の報告をA A研「通信」五五に、同第六回研究会(報告者、清水宏祐・吉田順一)の報告を同「通信」五六に掲載した。宮脇はまた、近く刊行される山口瑞鳳教授退官記念論文集「チベットの仏教と社会」に「オイラットの高僧ザヤパンデイタの伝記」を寄稿し、「民族の世界史、四、中央ユーラシアの世界」のモンゴリア系民族の項を執筆中である。宮脇の研究発表「『ザヤパンデイタ伝』の成立事情とその中の主要人物についての紹介であった。この伝記は、オイラト語のものが原典で、モンゴル語のもはその翻訳である。ドルベン・オイラトに属する集団のなかで、ホイトやブリヤトなどは一七世紀にはその活動が下火となり、代ってジュンガルやホシユートなどがその重要性を増してくるが、本伝記はその間の事情を伝える良い歴史資料である。ザヤパンデイタは、ホシユートの人で、トド文字を発明した人でもあり、また、移動式の僧院を拠点としたザヤパンデイタ教団が彼の弟子たちによってつくられていた。本伝記にはグライラマ五世やパンチェンラマ一世などのほか、グーシノミーンハーンなどのホシ

ユートやジュンガールの人々が登場する。以上の発表に対して、岡田英弘が、ザヤパンデイタはグライラマ五世のチユーターであったが、グライラマ五世の自叙伝には自身の幼少時代の記録が欠如しており、本伝記はその欠を埋めるもので、チベット史のうえでも貴重な資料である、とコメントした。

最後に栗林均が、コンフェツションと研究発表をおこなった。栗林は、「音声の研究」一二に「モンゴル語のウムラート現象」を、「国文学、解釈と観賞」一九八六一に「モンゴル語の動詞活用」を発表し、モンゴル学会で「ブリヤート方言の位置づけ」を口頭で発表し、三省堂の『服部四郎著作集』の編集をしている。栗林の研究発表「孤立的モンゴル系言語の位置づけ」は、公用語、標準語的性格をもつハルハ、カルムイク、ブリヤート、内モンゴル、オイラト諸語以外の、ダグルル、モンゴル、ドゥンシャン、バオアン、シラ・ユグルル、モゴル諸語の概況と研究状況を示し、これら諸言語の歴史的な位置づけと研究上の方法論について述べたものであった。一九五五/五六年の言語調査報告のあと、一九八〇年代に入って各種の出版物が公開されたが、特に一九八〇年の内蒙古大学蒙古語文研究所の調査と各方言の語彙集の出版は貴重である。ただ、この語彙集の利用には注意が必要で、ある種の操作を加えたい

で、はじめて利用可能となる。以上の発表に対して、樋口康一から、モンゴル祖語と各方言の系統図について質問が出、栗林は、皆が納得できる系統図はまだ無い、と答えた。

以上で、予定されていたプログラムのすべてが終了した。最後に後藤晃が、来年の予定について発言し、本年の世話人、細谷良夫、北川誠一、梅村坦、後藤晃の四人に加えて、関西の橋本勝、堀川徹両氏にも世話係をお願いしてあること、実務的な問題は東洋文庫で処理し、その事務担当に、本年は欠席しているが石橋崇雄に依頼済であることを報告した。参加者一同でこの報告を了承し、セッションを終えた。

夕食後に、川又正智による、イラク北部のヤズイーデーとよばれている人々の生活のスライドと懇親会があった。

翌二三日の朝食ですべての行事が終了した。なお、昨年来コンフェッションのありかたに関して参加者から様々な議論、提案がなされてきた。世話人としては、参加者が、私事にわたることではなく、各人の研究業績、各人が所属している機関の情報を公にし、互いに情報交換する場として、コンフェッションを位置づけている。

本報告は、コンフェッションの部分は森川哲雄が作成したメモ、シンポジウムの部分は北川誠一の作成した記録を

参照して、梅村坦の協力を得て、後藤晃がまとめたものである。なお、文中での敬称はすべて省略した。